

1年目の課題...フランス語！！

高瀬 智子

はじめに

『AZUR』創刊号に掲載の「留学にいたるまで」は、フランスの大学への留学にいたるまでの様々な手続きやエピソードを、日時を追って記した日記のようなものであった。これは、留学の夢を思い描きつつも、何か実際に一步を踏み出せずにいる学生たちに向けられた言葉でもある。本稿では、留学に関する事務手続きを終えてから、フランス語力のあまりない状態で始まった留学生活1年目のエピソードを中心に、大学での授業の様子や、現地の人々との出会いについて綴ってみたい。

1年目：1998年冬から1999年夏

1998年 冬：「ここは日本ではない」

はじめの一步を踏み出し、留学の手続きを整え、何とかフランスでの留学生活がスタートした。だが、ほっと息をつく間もなく、指導教授から800ページの博士論文を手渡された私は、ほとんど気の遠くなるような思いでポール・ロワイヤル駅に着いた。ここは大学の最寄り駅ではないが、何か気が滅入る時は、すぐにメトロに乗って地下に潜るより、一世紀以上前に建てられたアパルトマンの間を歩く方がいい。石でできた街のずしりとした存在感に、自分の悩みなどほんの砂埃のようなものだと思える時もある。気を取り直して駅の階段を駆け降りようとしたら...落ちた。痛い。抱えていた2巻の分厚い論文の重さに負けたなどと思いつつ立ち上がり、周囲の目に気づかない振りをして歩き始めた。ふとホームの壁を見ると、そこには数年前の冬、この駅でテロ事件に巻き込まれ、命を落とした学生への追悼の意を示すパネルがあった。そういえばちょうど数日前に、「何年前かにポール・ロワイヤル駅でパリ大学都市内のモロッコ館

の学生数人がテロ事件の巻き添えになり亡くなった」という話を聞いたばかりだった。転んだ痛みと共に「ここは...日本ではない」とパリに来て最も強く感じた最初の瞬間だった。

「言葉のできなさが役に立つ？」

大学の授業の日常的な場面でもそういったことはしばしば感じられた。例えば、恥をかくなら早い内に、と指導教授のゼミの開講後すぐに口頭発表をした時のことである。テーマは『『モリエール全集』1734年版の挿絵について』。フランス生まれのフランス人学生たちには、私の日本語訛りのフランス語による発表は聞き取りにくいに違いないが、辛抱強く聞いてくれた。そして意外にも、アラブ系、アフリカ系の、フランス語圏から来ている学生たちは、この和風フランス語に親しみをもってくれたようだった。このことは、フランスでフランス語を話すことの中に根強く残っているコンプレックスと、どこかでそれを強いるような空気について私に考えさせた。彼らによれば、「外国人学生は自分のフランス語がフランス人たちに受け入れられないことを恐れて、口頭発表をペーパーワークに変えることが多いので、自分たちもそうするしかないと思っていたが、君が今日がんばっているのを見て、チャレンジしてみようという気持ちになった。」というのだ。自分のフランス語のつたなさが劣等感以外のものになりうるとは思っていなかっただけに、このゼミ仲間の言葉は嬉しかった...というか、訛りだけでは済まない私のフランス語の不完全さに太鼓判が押されたともいえる。前向きに努力しようと思った。例えば、フランス語文法の練習問題なら、答えが違っている場合、×印をつけて、正解をメモすればおしまいである。時には正しい答えのみ書き写す...などということもあるかも知れない。でも、現地では、間違えや失敗は新たな出会いや発見の機会を提供してくれることもある。フランス語の“できなさ”は、留學生活の前半で、日本にいた時は想像もしなかった形で様々なものを見せてくれた。

1月、フランスに来て4ヶ月。授業の内容は半分も理解できない。ある日、いつものようにアピラシエド教授の授業に出た。演劇専攻のDEAレベルの全学生の必須科目、俳優の身体についての講義である。一番前の席に座り、教授に許

可を得てテープレコーダーのスイッチを ON にする。講義の文脈を追い、こんなことを話しているのだろう、と予測する。ポイントをノート。雑談も真剣に聴く。というもどこまでが雑談でどこからがポイントなのか、区別がつかないからである。どうしても重要そうな単語が分からない時は携帯用仏和辞典をひく。日本の大学の先生方の「いつまでも仏和をひいては...」という声が耳元で一瞬鳴り響くが、速く意味をつかむことが先決だと自分勝手な返事でその声を掻き消す。しかし、探していた単語は見つからなかった。すると、アピラシエド教授はその単語の意味を説明し始めた。教室に妙な静けさが漂う。皆、きょとんとした表情をしている。教授曰く「この単語を君たちの仲間がここで一生懸命辞書で探してるんだけど、これは *familier* なフランス語だから、辞書には載ってないんだ。それで、ちょっと説明しました。」150人に入る教室で学生をよく見ていると感心した。演劇の理論書を精力的に書き、時には自ら演出も手がけるというこの先生に限らず、様々な国籍の学生たちに接し、一人一人のレベルを考慮に入れて講義をするという姿勢を多くの先生方が貫いていることに感動した。将来教壇に立つ時には自分もこの姿勢を持っていきたい、と決意を新たにした。

またある放課後、とあるスーパーマーケットの出口近くで、おいしそうなピザをみつけた。

直径40センチはありそうなピザを切り売りしている。ウィンドーには色々な種類のものがすでに並べられている。「一切れもらおう」...しかし、ピザ“一切れ”はフランス語では何だったか、実は言えないことに気づく。英語なら *piece* だから...« *Une pièce, s'il vous plaît.* »と尝试してみた。すると、ピザ屋のおじさんは、何故か硬貨を一枚パチンとウィンドーの上に差し出した。そして、「*une pièce*」と言ったら、これ。ピザはそういう風には数えないよ。」と奥の方に引っ込んでしまった。「じゃ、どういう風に言うの?」と叫ぶと、彼は無愛想に出て来て「*une part*」か「*une portion*」。」と答え、また後ろを向いた。「*Alors, une part, s'il vous plaît!*」と言うと彼は振り向き、初めて笑った。私の指差したピザを一切れウィンドーから出し、くるりと紙で包み、私に手渡すと彼は言った「どうだい? フランス語って難しいだろう?」フランス人はフランス語を大切にしているという定説は度々耳にしていたが、このピザ屋のおじさんの態度から初めて

実感を持ってそれを確認したように思った。日本で、もし外国から来た学生が「トマト一本下さい。」と言ったとしても、数え方が正しく言えるまでトマトを売らない八百屋さんはおそらくいないだろう。

1999年 春：「これはレジュメではない」

留学生活の初めの半年は、様々な事務手続きと大学の授業に慣れるので精一杯である。1年目で必要単位を満たし、2年目で論文を書く、という計画は当初それほど無理なものとは思われなかったが、フランス語力のない場合、制限時間以内に長文を書くことを求められるテストや口頭発表をクリアするには実際かなりの負担がある。日本の大学で身につけた一夜漬けの技能はここでは通用しない。日常生活においては、フランス語の間違いはポジティブに働く場合もあるが、大学の勉強に関しては必ずしもそうはいかない。半年の滞在でフランス語がほとんど上達しないという事実から、日本を発つ前、留学すれば魔法のようにフランス語が上達するに違いないと想像していたことが完璧な幻想であったことが確認された。フランス語での授業の理解度は依然として低く、読んだ資料の内容は理解できても、それを記憶しておくことができなかった。つまり、フランス語で理解したことについて論じるベースを作れずにいたということである。これでは何も書けない。

2月の末、2週間の冬のヴァカンスが終わる。指導教授との話し合いで、次年度の論文執筆に向けて、まず、研究対象とする劇作家の主要作品のレジュメを作るようにという指示が出された。戯曲のレジュメとは、“あらすじ”のようなものと解釈し、自分の理解し得た最大限の内容と、解説書を組み合わせて何とかテキストを作り上げ、同じ寮に住むフランス人の友人に頼み込んでフランス語を直してもらった。4月の始め、それを指導のルージュモン教授に郵送し、数日後に彼女に電話で確認した。すると、「じゃ、今度の日曜、カルナヴァレ美術館でメルシエの朗読会があるから、そこで会いましょう。」という答えが返って来た。

パリで最も古い街並の残るマレ地区にあるこの美術館には、17世紀にセヴィニエ夫人が住んでいた部屋が保存されていたりする。約束の日、ルージュモン先生は少し遅れていらした。「ごめんなさいね。駐車する場所を見つけるのに苦

労したわ。」「あ、いいえ。あの、この間のレジюме、どうでしたか？」私は提出したレジюмеが教授の目にどう映ったか知りたくて、すぐにたずねた。「まず、フランス語がひどいわね。それに、これはレジюмеではないわ。全部やり直していらっしやい。」あまりにも明確な応答に一瞬頭が空白になる。

その日の“朗読会”の内容は何一つ覚えていない。朗読会が終わってから、気持ちを立て直し、教授に自分が資料の内容を“記憶”できないことを打ち明け、戯曲のレジюмеとはそもそもどういうものか、と思いついてきいてみる。

「頭で覚えられなかったら、手を使いなさい。写すの。それからレジюмеは一幕ごとに誰が何をしてどうなったか、展開が分からないとね。あなたは解説書を部分的に写したでしょ？ あれはね、私が授業の準備が間に合わないときに時々使う手だけど、よくないわ。やめなさい。」スイス系フランス人のこの先生はゆっくりと、含めるように指導して下さった。先生にお礼を言い、ごっそり手元に戻って来た数編の戯曲のレジюмеを抱え、文字通り、穴があったら入りたい気分でメトロへの階段を降りる。私のショックを見越して、美術館に誘って下さったルージュモン先生の心遣いに頭の下がる思いがする。

1999年 夏：第二のショック～留学1年目の終わり

このカルナヴァレ美術館でのショックは、私をフランス語力向上への努力に駆り立てた。教授からのアドヴァイスを生かしつつレジюмеを作り直し、今度はそれを、知り合いの紹介してくれた、元高校の文学の教員で、現在は留学生の論文添削をしているという方に見ていただいた。その先生曰く、「君のフランス語では論文は難しいだろう。」第二のショックは、私を語学学校へ駆け込ませた。いつの間にか夏になっていた。

思わず申し込んでしまった私立の語学学校の外国人向け夏季集中講座には、大学院レベルのフランス語に見合うクラスはなかった。よく考えれば当然のことである。そんなことにも気づけなかったのに苛立つと同時に、まだ何か「教えてもらおう」と待っている自らの姿勢がいけないのだと気づく。

気分を一新するために、アヴィニョンの演劇祭に行こうと思いつく。だが、もうホテルを予約するには遅いし、お金もない。試しにアヴィニョンの観光案

内所にファックスを送ってみる。「パリ第 III 大学で演劇を専攻する日本人留学生です。お金があまりありません。私を何日か泊めてくださる家族をご紹介いただけますか？」すると、この観光案内所の責任者の女性から、翌日返事が来た。「じゃ、私の家にいらっしゃい。」こうして、思いもよらず、アヴィニヨンの演劇祭の最後の数日を楽しむことが叶った。

8月、パリに戻り、ヴァカンス出発直前のルージュモン先生にもう一度お会いする。自分のフランス語力を測った上で、論文の主題を、ある一つの戯曲の三つの版を比較する、というものに限定しようと考えている、と相談。先生は、やっと研究対象的が絞られたことに安心した様子だった。また、事前に郵送した戯曲のレジメについてのコメントをお願いすると、「まだ、はっきりしないところもあるけれど、前より良くなったわ。」と言って下さる。やっと夏休みになったとほっとする。

日本の家族や友人へのおみやげを探しに街に出る。英語を話す人の多さに「ああ、ヴァカンスだな。」と思う。帰り道、サン・ミシエルの駅にメトロが止まると、誰かが叫んだ。「オー、セント・マイケル！！」...思わず振り返ると、アメリカ人のお年寄りの笑顔が輝いていた。

このように、留学1年目の様々な体験は、良きにつけ、悪きにつけフランス語力のなさ、というのがキーポイントとなっていた。フランスの大学の第三課程（DEA以上のレベルを指す）では、様々な研究の理論が常に問い直されているという前提の下に、研究の入り口にいる学生たちには論理立てて書く、という能力が強く要求されると私は理解した。例えば、書物の意味するところを理解するのみでなく、それについて、自らの視点から論じることができなければならない。多くのセミナーも、結局はそれぞれが自らの研究を豊かなものとするためにはその内容をどう生かすか、というのが課題とされているようだった。つまり、試験やレポートのテーマとして、授業で扱われたものは基本的に出题されることはない。それぞれが授業で理解した知識や理論をいかに運用するかを提示することが問題になってくる。そこに応えていくためには、「教えてもらおう」という姿勢で授業に取り組んでいてはとても追いつかないのである。私の場合、このこと自体に気づくのに1年かかってしまった。もし、今、留学を計画している学生がいるなら、日本にいる内に、フランス語で論理的に書く

ための勉強を始め、是非、今から、学んだことを、自らの研究にどう生かすかを念頭におきつつ、積極的な姿勢で取り組んでいてもらいたいと思う。そうして姿勢を転換した時、初めて見えてくるものもある、ということに気づくのではないだろうか。⁽¹⁾

2年目：1999年秋、新たな種蒔きから2000年秋の実りまで

日本の夏を満喫した後9月にパリに戻る。2年目は、1年目に評価点の良くなかったセミナーの代わりに別のセミナーを履修しつつ、留学をまだ夢としていた頃に考えていた「演劇と教育」というテーマについても取り組むために、新たにパリ第III大学のフランス語教育学科の語学教育に関する資格（児童・および青少年のための外国語・文化教育）のコースをとることにした。DEAの論文と両立できるだろうか、という不安もあったが、もうこの1年を逃したら、次にフランスで長期滞在などできないことを考え、頑張る決意をした。

このフランス語教授法のコースは、すでに小学校や中学校の教師として働いている人も学べるようにと設置されたもので、授業は火・木の夕方と水曜の全日（週13時間）とされていた。従って私は、日中は図書館で論文の資料を書写し、夕方から授業に出る、ということが多くなった。「頭がだめなら手を使う」という指導教授のアドヴァイスを心に置きながらも、資料を写す、という作業は骨の折れるもので、これを始めて数ヶ月たったその頃、「時間の無駄ではないのか」という疑いが芽生えていた。しかし、教授法コースの授業が始まると、その疑いは吹き飛んだ。ノートをとるスピードが数段速くなっていたのである。授業の内容も...解る！子供を机に縛りつけ、大人の勉強方を押し付ける代わりに、子供の世界の“遊び”の法則を外国語の学習に導入してみよう、というコンセプトを持つこのコースの後半は教育実習が中心となった。3人のグループで実験授業を考案。これを小・中学校で実施し、その様子を録画、後に全員でコメントし合う、という作業が繰り返された。演劇も“遊び”（jeu）、あるいは非言語的要素を導入する道具としてこれらの実習のテーマの1つとして取り上げられ、私は、友人たちと議論（喧嘩も含む）を重ね、タップダンス（claquettes）で発音（phonétique）を学ぶ“Phonéquette”という授業を小学生向けに考案、実施した。この過程で、比較的裕福な家庭の子供たちの通うインターナショナル・スクー

ルから、移民の多く住む地域の中学校まで、学校という空間を通してフランス社会の色々な面を見ることになる。様々な理由で移民に至った親の子供たちが自国の文化に劣等感を感じず、フランス語と文化に馴染んでいけるような配慮が現在なされていることを、このプログラムを通して確認できたことは、18世紀末の革命下、人の権利について多くの問題を提起した劇作家を研究する私にとって、非常に貴重な体験となった。

実際、このコースをとったことで、表面的には DEA の論文の進行は確かに遅れ、日仏双方の指導教授にご心配をおかけした。けれども、この体験は、歴史（演劇史）を学ぶ者としておそらく大切な、過去に存在した人間の仕事が直接ではないにせよ、何らかの形で現在に生きているという感覚を私に与え、研究対象をより身近なものとしてくれた。「手を使って」資料を写すという作業は2年目の終わり頃には、資料への愛情のようなものを示す身振りとなっていった。1年目、資料の内容が記憶できなかったのは、きっと、この愛情が自分になかったからでもあると気づく。

7月、フランス語教授法の資格が一まず取得でき、いよいよ DEA の論文にとりかからねば...とのんきなことを考えつつ指導のルージュモン教授に今後の計画について相談に行く。今度は雷が落ちた。「今はもう、こうしたいああしたいという時期ではないはずです。あなたは2年間何をしていたの！やる気があるの、ないの？今日は、oui が non が言ってから帰りなさい！」プランなどは3月頃に提出していたものの、本文は20ページにも至っていなかった。教授が腹をたてるのも無理はない。それに、DEA の進行の遅れの言い訳をするのがいやで、私はフランス語教授法コースの負担について彼女に何も話していなかった。顔から血の気が引いていくのを感じつつ、やっとの思いで一言答える。“Oui.”

7月28日、本文を書き進めながら、コメディエール・フランセーズの資料館に通い、最後の資料収集をする。この日を最後にこの資料館は夏の休暇に入り、9月15日、私の論文の締め切りの日まで開館しない。必死、という空気が伝わったのだろうか、資料館の司書のベアトリスさんが、閉館時刻間近に私の隣に座った。「どこを写すの？私も手伝うわよ。」資料館といっても6人も入れれば一杯になる小さな部屋である。「あ、ありがとうございます。ここ、お願いします。」その様子を見ていた受付の女性も「今日はあなたが写し終えるまで、私はずっ

ここにいるから、大丈夫よ。最後まできちんと仕事をしていきなさい。」と言って下さる。非常に心強かった。フランス人は冷たいとかプライドが高いというのを一般論化してはいけない、と心から思う。この日、夕立の後、パリの空に虹が出る。

8月、色々な人に励まされ、寮の部屋を転々としてはご飯をごちそうになり、日本から遊びにきてくれた友人には「悪いけど、適当にしてくれる？」と勝手なことを言い、家族や先生方に心配をかけ... 9月、論文が書きあがった。2人の教授の立会いのもとで行われる最終口頭試問では、15分ほどの口頭発表の後、教授たちからコメントや質問がある。

7月の雷以降も根気よくご指導下さったルージュモン教授のコメントは、「あなたは、フランス語がほとんどできない状態に入ってきたけれど、よくここまで来ました。今日は、私は何も言うことはありません。」...いつものことであるが、はっきりしていた。つまり、コメント、なし？ 久しぶりに見る先生の笑顔に、彼女の教師としての姿勢を確認する思いがする。2000年秋、様々な人の支えによってこうして一つの実りが迎えられた。

おわりに

なぜ留学するのか？ 語学力に磨きをかけ、将来の研究・仕事に生かすため、視野を広げるため、ちょっと時間稼ぎ...人それぞれ、様々な理由がある。だが、生まれる前になぜこの世に生を受けるかの理由など予想し得ないように、海外で学びの場を得ることの意味は、実は留学生活が始まると同時に問われ始めるものであり、留学を終えて帰国してからも恐らくその答えはすぐには見つからない。そしてそれは一人一人が出会う出来事、人々によって異なるはずである。だが、この“問い続ける姿勢”をとらざるをえない機会に巡り会えることが、留学を通して得られる最も大切なことなのかも知れない。

今、留学への一步を踏み出し、二歩目をどの方向に出せば良いのかもわからないのに、先のことばかりが気になって、不安にかられている学生たちがいるとしたら、これらのエピソードを通して、彼ら、彼女たちが肩の力を抜き、深呼吸をする時間と、周りで支えてくれる人の多さに気づく機会を提供できれば幸いである。

註

- (1) 本稿とは別に今回“研究ノート”として掲載されている試論は、このような発想のもとに書かれたものである。セミナーで扱われていたのは、17世紀フランスの絶対王政に至るまで、街の中で行われていた“*Entrée royale*”という権力誇示のスペクタクルの仕組みと、当時の劇場で上演されていた戯曲の中での様々なシンボルの使用法の分析であった。レポートの課題は、授業で扱わなかったフランス古典期の戯曲を選び、そこに用いられているシンボルの意味から、当時の作家たちが政治的権力にどのような戦略を持って揺さぶりをかけようとしていたかを探る、というものであった。しかし、私にはギリシャ神話をベースとしたシンボル読解の能力はないため、セミナー担当の教授に、日本の17世紀の“大名行列”という権力誇示および温存のための、しかもスペクタクル性を持った仕組みと、同時代の劇場でのスペクタクルについての考察というふうにテーマを置きかえたいと相談し、この試論を執筆するに至った。研究ノート、と題しているように、これは完成されたものではないが、例えば、文化的背景の異なる教育を受けてきた日本人学生には難しい課題が出された場合の一つの可能性としてこの試みは何かの参考になるのではないかと思われる。

尚、この試論を読んで下さった、セミナー担当のピエ教授は、「近松の演劇美学というところまで、もっと具体的に、台詞を足場にして分析することができれば、さらに興味深いものになるだろう。手元にとっておきたいから、コピーを一部送ってほしい」というコメントを下された。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第3号(2002年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html